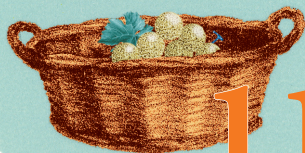


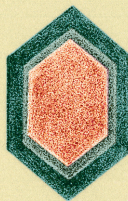
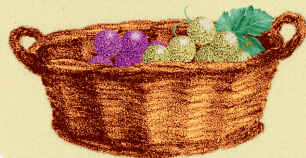
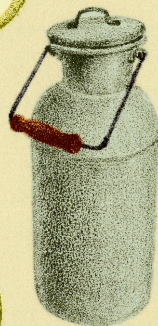
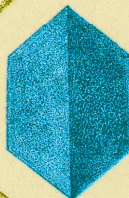
禪の友

—Zen no Tomo—



11

November 2022





ご本山だより 大本山永平寺【雪囲い作務】

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



永平寺を包み込む大自然も、永平寺の伽藍も、晩秋の冷気に呑み込まれもみじは深紅に染まりました。早いもので、春を迎えて雪囲いを解いたのも束の間、もう冬に備える季節です。

伽藍の各所に縦横に丸太が組まれ雪囲いの準備が進みます。十一月下旬には雲水総出の「雪囲い作務」です。雲水たちは重さ二十キロ程の竹箆を肩に担ぎ、傾斜と障害物の多い境内を何往復もします。そして、骨組みの竹箆を丸太にビニール紐で結び付けてゆくのですね。作業が進むと伽藍内からの眺望は失われますが、積雪から伽藍を保護し、そこで営まれる修行を護る為には欠かすことのできない風物詩です。

春になれば雪囲いを解き、冬、また雪囲いをする。それは何百年も続いてきた永平寺の行持の一つです。巡り来る季節に合わせ、能動的に、しかし坦々

と勤められます。言い換えれば、諸行無常・諸法無我という絶対の真理に我が身・我が心を投げ入れてゆくのです。「ただわが身をも心をも放ち忘れて、仏の家に投げ入れて、仏の方よりおこなわれて、これに随いもて行くとき、力をも入れず、心をも費やさずして、生死を離れ、仏となる」ご開山道元禅師さまのお示しです。

仏の家とは、諸行無常・諸法無我の真理そのものでありましょう。また、大自然と共に在る永平寺そのものでもあります。雪囲いをし、雪囲いを解く、我が身・我が心という執着や煩惱を放ち忘れ、仏の方より行われる行持を只管勤めてゆくのです。

力まず、図らず、無常・無我という縦糸に、一刻一刻雲水たちの行持が織り込まれ紡がれてゆきます。地味ではありますが、雪囲いにも負けぬ丈夫な織物です。



ご本山だより 大本山總持寺

【人人悉く道器なり、
日日是れ好日なり】

『伝光録』第十祖 脇尊者章

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二二



十一月は霜月という別名がありますが、これは「霜降り月」が省略されて「霜月」に転じたとされています。陰暦十一月を陽暦に当てはめると十一月下旬から一月上旬になり、ちょうど霜が降りるところとなるわけです。

さて、この十一月五日は今から一年前の明治四十四年に總持寺が能登門前から鶴見へ移転し、遷祖式が現在工事中の放光堂で盛大に行われた日なのです。この日、開祖瑩山禪師・二祖峨山禪師をはじめ歴代の御真牌（お位牌）が能登から移され、正式に本山が移転したことになった日であります。これを機に毎年行われていた「ご移転記念行持」「つるみ夢広場イン總持寺」は今年もコロナ感染症の影響を受け、止むなく中止とさせていただきます。

何とか収束を迎え、早く地元の人と

の触れ合いができればというもどかしさばかりが募ります。

山内では先月、本山独住二十六世に就任されました石附周行禪師御総覽のもと、来年の一月までの三ヵ月間の冬安居結制の修行期間に入っております。中でも十三日から十七日は「制中五則」の期間で、その最終日に「首座法戦式」が行われます。また二十一日には開祖瑩山禪師の降誕会（誕生日）の法要が修行されます。

標題の『伝光録』の教えはすべての人には仏の教えを備えるべく器量をもっている。この今という刹那刹那を大切に過ごすことの積み重ねが大切であり、それによってあらゆる時がすばらしい日日となってくると示されています。この降誕会が過ぎると年内最後の行持である臘八摂心を迎えるのです。

選・坊城俊樹

雁渡し漁火ひとつかへり来ず

埼玉県 浦宏之

【評】「雁渡し」は秋になって吹く北風のこと。この頃雁が渡って来る。漁師たちはそれを見てこの言葉を使ったという。しかしこの句の事態は何事起きたのだろうか。単にその漁を頑張って戻らないのかもしれないが。そんなことを考えさせるのも俳句の余韻。

疲れたる網戸を洗ふ秋の雨

福島県 鈴木 嘉志雄

【評】この句の主季題は「秋の雨」。「網戸」は夏季題だが今はもう秋。暑さに疲れた網戸をやさしく慰撫するように秋の雨が降っている。この網戸の擬人化もまた効果的である。そんないろいろな技巧が詰まったこの句はなかなか余韻のある高級な句と言える。

◆ 降るものはみな受けとめる蓮の葉 千葉県 須見祥子

◆ 人乗せて残暑の駱駝うま俯けり 島根県 藤江 堯

◆ 流灯の行く手に堰の闇深き 岐阜県 大下雅子

◆ 夢路までしげくなりゆく虫の声 鳥取県 徳本義則

◆ 夕焼けに海と空とが真つ二つ 福岡県 小金丸速子

◆ 墓洗ふ隣の墓に声かけて 愛知県 紅林廣子

◆ 空蟬を拾ひ集めて窓の辺に 岩手県 阿部 潔子

◆ 海の日や陸おかで余生の明治丸 東京都 鈴木英治

◆ 炎昼や赤信号の数珠つなぎ 大阪府 花谷広文

◆ 口のなか賑はつてゐる通草種 三重県 西村廣視

選者吟

力士碑は一千貫の秋の巖 俊樹

【作句小見】東京の富岡八幡宮には歴代の横綱の名を彫った巨大な力士の碑がある。仮に一千貫だと三トンくらいか。この巨大な碑を見上げながら作った句。まるで横綱みたいに固くてゴツゴツした巖としか思えない。境内の裏側に立つそれは哀愁に包まれていた。

選・長澤 ちづ

開墾の稲田が今は荒れ果てて猪親子の沼
田場となりたり

三重県 西村 廣視

評 猪が体に付いたタニなどを落とすため泥浴びをする処が泥田場。先人が苦勞して切り拓き稲田とした土地が荒廢してゆく様を嘆く歌。作者の直接の先祖か否かは分からぬが無念さが籠る。日本の食は如何にの間も投げかけるようだ。

牛蛙を呑みこみ兼ねて足二本垂らして浮
遊す五位鷺の困惑

大阪府 牧野 賀子

評 牛蛙は体長二十センチというから五位鷺が呑み込むには大き過ぎた蛙だろう。鷺も困惑しただろうが、呑み込まれんとする蛙はもっと辛い。食をかけた生死の闘いである。

◆ 僅かなる残りの命に味覚なく涙の味も知らず生きゆく

石川県 千間 宏治

◆ 夕顔の実を三つに切りて丸み帯びししんがりの分を友はくれたり

岩手県 阿部 潔子

◆ 帰省の夜父の点前で飲みしお茶思い出し居る昨日の如く

鳥取県 徳本 義則

◆ 夜の更けて寄合帰りの軽トラの灯火に浮かぶ猪二頭

鳥取県 眞山 博充

◆ 公民館のロビー展示の絵の中にごろんと転がる筍のあり

山口県 濱田 道子

◆ 書留の妹あては裕次郎ひばりの記念切手を貼りぬ

静岡県 末光 愛正

◆ 毎日が「母の日」ですとは同居の娘われは応じる「娘の糞中」

静岡県 杉原 民子

◆ 砂の中配列よろしく置かれたる庭の飛び石に木洩れ日の差す

島根県 宮廻 恒雄

◆ コロナ禍の弔い侘し香焚きてあと退り来つ語らい惜しみ

岩手県 宍戸 さとる

◆ 夫逝きて二十三年過ぎ来たり形見の風鈴我を上げます

長野県 宮本 美代子

選者詠

肩上げの下ろし方など聞いてくる

娘に七つの娘いること

ちづ

作歌小見

杉原さんの歌の母と娘の掛けあいの軽妙さ、褒めても貶しても結局、母娘は似たもの同士。宍戸さんの一首はコロナ禍の弔いの哀しさを言い得ています。まだ葬儀に参列できたことは幸いで事後報告のようなこともあるかと聞き及びます。